

大人が絵本を 第3回 いいぞ！がん



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*
小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリアキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

○ファーストブックのおはなし

「ぶーん」「ぶくぶくぶくぶくん」「ぶぶぶぶぶぶ」「どどどおーん」。原色の絵本を見せながらこの言葉を読むと、3か月児はニコニコと笑い、表情豊かな乳児は、キャッキョと声を出しながら身体全体で楽しさを表現します。このおもしろい音の連続は、『ごぶごぶ ごぼごぼ』(福音館書店)の一節で、ファーストブックの定番となっています。

ファーストブックとは、赤ちゃん絵本の別称で、子どもが会う最初の本としての位置づけから、この名称となりました²⁾。前号の「うさこちゃん」の最初の翻訳絵本『ちいさなうさこちゃん』(福音館書店)は、1964年に「子どもがはじめてであう絵本」というキャッチコピーで出版され、「うさこちゃん」の登場により、それまで絵本は3歳くらいから読むものとされていた概念を覆すことになり、3歳以下の子どもでも絵本を楽しめることが注目されたのです。これをきっかけとして、3歳以下の子どもにも少しずつ、絵本が読まれるようになりましたが³⁾、それでもまだ、0歳児と絵本は一般的に結び付いていない時期がありました。

赤ちゃん学の発展とともに、1992年、イギリスで始まったブックスタートを機に、乳幼児と絵本の関係を捉える視点が変化しました³⁾。図書館、書店、出版社を中心と

する書籍文化産業界で、乳児への読書が実践され始めたのです。その後、日本でブックスタートが始まった2001年を境に、絵本は0歳児から楽しむものであるという考え方が、日本国内でも徐々に浸透していくことになります。

○オノマトペとは何？

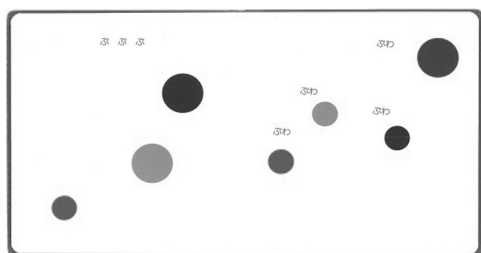
ブックスタートの広がりによって、乳児からの読書習慣が広まってきました。前号で述べたとおり、視力がごく僅かに発達する3か月児は、原色の絵が識別できるようになり、原色の絵とともに言葉のリズムを楽しむことが、乳児と絵本の新しい関係となります。この時期の乳児にとって、絵本はリズム遊びの道具で、冒頭の言葉などは、乳児の大好きなリズム音なのです。『ごぶごぶ ごぼごぼ』に代表されるようなオノマトペ絵本は、言葉の意味あいを理解して楽しむものを越えた音の感覚世界を体験する絵本なのです。

オノマトペとは、「擬声語(動物の鳴き声や人間の声を模倣してつくられた語)や擬音語(声以外の自然界の物音を模倣してつくられた語)、擬態語(動作の様態や事物の状態を象徴的に描写してつくられた語)そして、特に人間の心理状態である『いらいら』、『うきうき』などを象徴的に描写する『擬情語』」があり、「音の響きから得られる意味を表わす感覚的なことばで、一般語よりもいきいきとした臨場感に溢れ、繊細かつ微妙な描写を可能にする日本語に不可欠な言語」⁴⁾と解説され、日本語の特色でもあるのです。

○身の回りのオノマトペ

オノマトペを意識してみると、私たちの生活にオノマトペとの出会いが密接であることに気づかされます。それは乳幼児の回りに限らず、一般生活の中に溢れたオノマトペをあちこちで見ることができます。

2013年6月11日放送のNHK番組「クローズアップ現代」



駒形克己さく『ごぶごぶ ごぼごぼ』(福音館書店)より

手にするときは！ ばれ！オノマトペ Part 1

企画 濱野 良彦
構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ
(福岡市)

では、『オノマトペ』大増殖の謎』をテーマに、トップスポーツの現場や医療現場、企業、国会などオノマトペが使われていることに注目し、あらゆる場所で調査・分析を行い、その効用を明らかにしました。国会でのオノマトペ使用回数は、20年前には年間1万5,000回ほどでしたが、2011年には4万回近くまで増加しているそうです。スポーツ現場では、オノマトペを使うことによって、選手の脳の中に神経回路ができ、それを手がかりに自分の中で運動のイメージが広がっていくことが分析されています。また、医療現場のオノマトペは、医師が患者をより深く理解することと合わせて、患者自身が自分の症状に正面から向き合う力を与える効果があると報告しています⁵⁾。オノマトペによる表現が、人間の持つ潜在的な力を引き出したり、心を和らげたりしているのです。私たち日本人の誇れる言葉文化です。

同番組で、明治大学教授の小野正弘氏は「オノマトペの特色は実感が伝わることばということ」、そして「実感を伝えることができるということがどれほど人の心にとって解放をもたらすか」と述べています⁵⁾。

ケータイの普及により、若者ことばとして増殖を始めたオノマトペが、今では論理的解釈の元、各業界でさまざまな効果を発揮し、社会的地位を得るまでになったのです。オノマトペは、赤ちゃんことばでもなく若者ことばでもなく、日本語独特の文化なのです。小野氏の言う「日本語が情感を尊ぶことば」⁵⁾であるからこそ、今、日本語のオノマトペに視線が注がれ、効果が見直されているのだと考えられます。

○赤ちゃん絵本とオノマトペ

今、社会で注目を集めているオノマトペですが、赤ちゃんにとっては感覚的楽しみとして定着してきたところで

す。社会的な認知度の低かった20年前をさらに5、6年遡った1980年代後半から、オノマトペ絵本が出版されるようになりました。90年代に入って、赤ちゃん絵本にオノマトペが多く取り入れられるようにもなりました。ただし、大人に理解されないまま置き去りにされてきた実態もあり、赤ちゃん絵本とオノマトペが本当の意味で広く活用されるのは2000年代以降のことです。実際に、今でも新米お父様・お母様へオノマトペ絵本の意味や楽しみ方を説明すると、初めて知ったと感心したり納得したりという大人が9割に上ります。

オノマトペの先駆け絵本は、誰もが知っている『もこもこもこ』(文研出版)⁶⁾です。「しーん」「もこ」「もこもこによき」「もこもこもこによきによき」。

出版社編集長を歴任し、擬音語・擬態語を研究した後路好章氏は、『もこもこもこ』について「十の擬態語と、一つの擬音語の十一個で構成」し、「明確な意味を持たない感覚的なことばだからこそ、言語の発達が未発達な幼児が感覚的に理解できるのではないだろうか⁷⁾と分析しています。また、版元の編集者は「1977年の出版当初は、全く売れなかったのに、十年くらいたってからじわじわ売れ出した」と報告しています⁷⁾。

ここで、当館での事例を紹介します。絵本デビューの乳児、あるいはデビューはしたものの、親がどう読んでよいか試行錯誤中の3か月児に、司書が『ごぶごぶ ごぼごぼ』を読むと、すべての乳児が反応を示します。ニコニコ笑ったり、きゃっきゃっと声を出したりして楽しさを表現する乳児は、およそ8割に及びます。残りの2割は笑わないけれども、絵をじーっと見たり、読み手の口や目をじっと見つめて観察をしています。

【事例1】Sくん(3か月)

乳児にどのように伝わっているかをお話するために、



絵本の日



10.22 図鑑の日

『ごぶごぶ ごぼごぼ』をお母様に紹介。読み方アドバイスで、母児と司書が対面する形で読みあうと、Sくんがきゃっきゃと声をあげて笑う。あやしたわけでもないのに、声をあげるSくんにお母様もびっくり。

Sくん母児のケースは、初めて来館する母児のほとんどに見られる反応です。司書の立場では、絵本を楽しむ親子を増やす嬉しい瞬間でもあります。

【事例2】Hくん(4か月)

4か月から当館を利用しているHくん母児。司書が絵本を読むと笑うのに、親が読んでくれなくて悪戦していたお母様。「母はめげない」と頻りに通いアドバイスを求め続けたある日、お母様との読みあいで笑ったHくんにお母様が嬉しそう。当館で最初に見つけたHくんのお気に入りには、オノマトベ絵本『ぴつつんつん』。

それまで、おふろタイムになると泣いたりぐずったりしてお母様を手こずらせていた入浴嫌いなHくんは、入浴時、お母様が暗記してしまった『ぴつつんつん』のオノマトベを繰り返すと、ぐずることなく入浴完了。

当館では、絵本に書いてある文字どおりに読まず、乳児が反応した言葉はたくさん繰り返すよう助言しています。事例2のように、リズムカルな読み方を助言し、お母様がチャレンジを繰り返した結果招いた親子コミュニケーションの成立です。その結果、入浴という乳児にとって嫌な場面で、親があやし語りかける言葉だけで乳児の気持ちは逸れなかったのですが、乳児自身が味わった心地よい音の響きが繰り返されたとき、「嫌な気分」も吹き飛ぶくらいの楽しさを体感できたのですから、まさしく絵本力なのです。

【事例3】Nくん(3か月)

3か月児向けの『ごぶごぶ ごぼごぼ』を差し出すと、表紙を見ただけできゃっきゃと笑い声をあげるNくん。既に、親子で読みあったことのあるNくんの好きな絵本とのこと。本文を開かず、文字も読まないうちから笑い出すNくんは、その場にいたみんなが驚く。

そして、うちの子にもと別のお母様。残念ながら、1歳児では同じ反応は見られませんでした。

絵本の表紙を見せただけで、声をあげて笑い始める反応は興味深いものです。絵の形と色が、乳児自身にとって楽しいものであると認識しているからこそその反応であって、それはお気に入りのおもちゃに対するものとよく似ていま



作：駒形克己
出版社：福音館書店

す。そうです、0歳児にとっての絵本は、感覚を心地よく刺激してくれるおもちゃの領域と重なり合います。

【事例4】Rくん(5か月)

3歳のお姉ちゃんとお母様と3人でよく来館する仲良し姉弟。お母様はお姉ちゃんと読みあい、Rくんは床でバタバター一人遊びが上手。ある日、Rくんと司書が『かんかんかん』を読みあったところ、ニコニコ、ニヤニヤ楽しい反応。お母様は「わかるんですか？」の質問と、「上の子には読んでも、下の子に読んだことがない」とのコメント。

お姉ちゃんとだけでなく、Rくんとも読みあうようになった母児。そして、『かんかんかん』は「喜ぶから買ってあげた」と家庭でもRくんと読みあいができ、母児ともに大喜び。

先に、「ブックスタートの始まりを境に、絵本は0歳児から楽しむものという考え方が、日本でも徐々に浸透していくことになる」と述べましたが、本当に「徐々に」の実例で、第二子をもつお母様でも認知度に差があるということ、当館で乳児と絵本の普及活動に従事するようになって強く感じています。

【事例5】Eくん(5か月)

『ごぶごぶ ごぼごぼ』も『ぴつつんつん』も『もこもこもこ』も、その他のオノマトベ絵本をたくさん読み、ニコニコ、キャッキャッと楽しんでいたEくん。次に読んだ『ほぱーべほびぱっぷ』にキャッキャッ、アーウー、ギャーギャーと大きな反応。お母様も「何これ？」と大笑い。何度読んでも同じ反応を繰り返し、自宅でも同じ反応ということで、とうとう『ほぱーべほびぱっぷ』買いました。

現在、多数出版されているオノマトベ絵本でも、個々の乳児によって気に入る絵本が分かれるということです。Eくんは、喉が張り裂けるばかりに大きな声で絶叫したのです。大人の言う「ツボにはまった」に当たるのでしょうか。

当館で、4～6か月児のお母様へおすすめする絵本群が類似していても、「うちの子が喜ぶから買った」と報告される絵本は異なります。乳児期であっても、それぞれの感覚に訴えることばの響きは、異なるということです。

○日本語文化としてのオノマトペ

親子の楽しい場面は、まだまだたくさんあります。0歳児にとっての絵本は、感覚を心地よく刺激してくれるおもちゃの領域と重なるため、お母様お父様にとっては、乳児と触れ合い、楽しさを共有するためのツールとなります。言語的会話が成立しない乳児との会話は、親が子の名前を呼んだり、相互に共有しているものの名称を語りかけたりすることで、反応を示すというものです。

ところが、その会話には語彙の幅に限界があります。そこに絵本が介されると、親の語りかけが豊富になり、乳児に心地よい言葉がオノマトペとしてたくさん届けられることになり、乳児の反応もより豊かになるのです。そのような我が子の豊かな表情を見た親は幸せな気分で、さらに語りかける言葉も表情もこやかになり、双方がその表情を感じ合うことで、相互的なやりとりが生まれるのです。このように、おもちゃの領域を飛び越えたところが、絵本の領域なのです。

当館では、絵本に書いてある文字どおりに読まなくても良いので、乳児が反応した言葉はたくさん繰り返すよう助言しています。他にも、司書が母児と対面して読みあうときや、0～1歳向けおはなし会では、乳児が反応を示した言葉を、文字以上の繰り返し読みをしています。あるいは、文字上ではオノマトペ表現ではないものも、オノマトペに置き換えて語っています。そうすることで乳児が心地よいだけでなく、お母様もリズムに乗りやすく、乳児を抱いたままリズムに合わせて自然と身体が揺れて、親子が一体になれるのです。

7か月くらいから子音と母音を合わせた規準喃語を発するようになり⁸⁾、親子の会話に幅が広がり始めます。そして、もうひとつ、6か月くらいからオノマトペだけでない

絵本にも楽しみを見出し、絵本の幅が広がり始めます。ただし、個人差はあります。オノマトペ絵本によるコミュニケーションは、6か月くらいがひとつの境です。しかし、1歳児でも、あるいは3歳児でもオノマトペに良い反応を示します。年齢に応じたオノマトペ絵本を選ぶことも大切になってきます。

絵本が持つ力、顕在的な力と潜在的な力、すべての力が、乳児と親とのかかわりあいを引き起こしていると言えます。絵本とのかかわりをとおして、乳幼児が育つのはもちろんのこと、親、とりわけ第一子を子育て真っ最中の新米お母様が、母親として育っていく姿が目に見えてわかります。それは、お母様自身も感じられていることで、よく、その気持ちを表出されます。お父様・お母様は絵本の文字を読んでいるのですが、乳児にとっては、自分に向けて発してくれている心地よい言葉なのです。オノマトペ絵本は、乳児親子のコミュニケーション力を高め、絆を深める魔法の絵本です。それは、日本独特の言葉文化にオノマトペをもつ我が国の特権です。オノマトペがあるから、乳児とのコミュニケーションが容易にでき、絆が深まるのです。オノマトペがあるから日本語絵本は楽しいのです。

文 献

- 1) 駒形克己：ごぶごぶ ごぼごぼ、福音館書店、東京、1997
- 2) 中川素子、他 編集：絵本の事典、朝倉書店、東京、pp.324, 2011
- 3) 生田美秋、石井光恵、藤本朝巳：ベーシック絵本入門、ミネルヴァ書房、京都、pp.50-53, 2013
- 4) 田守育啓：オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ、岩波書店、東京、pp.4-23, 2002
- 5) 日本放送協会：“ばみゅばみゅ” “じえじえじえ”～「オノマトペ」大増殖の謎～、NHK クローズアップ現代、2013. 6.11, NHK ONLINE http://www.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail02_3362_all.html
- 6) 谷川俊太郎 作、元永定正 絵：もこもこもこ、文研出版、東京、1977
- 7) 後路好章：絵本から擬音語・擬態語ぶちぶちぼーん、アリス館、東京、pp.21-24, 2005
- 8) 繁田 進：乳幼児発達心理学、福村出版、東京、pp.26-27, 2012